

提出日：令和 5 年 3 月 2 日
所 属： 獣医学部 動物応用科学科
氏 名： 塚田 英晴 職位： 准教授

I ティーチング・ポートフォリオ

1. 教育の責任（教育活動の範囲）					
私は 2015 年に動物応用科学科野生動物学研究室の専任教員として赴任して以来、野生動物学分野に関わる教育・研究活動に従事してきた。令和 4 年度には学部で 12 科目、大学院で 4 科目を担当した。 野生動物学分野の教育には、野生動物の実態を野外で実践的に学ぶことが重要と考え、特に野生動物学野外演習や卒業論文などの科目では、実際のフィールドでの調査活動を通じ、座学で学んだ知識と技術の定着に力を注いでいる。学生たちが、本学で学んだ知識と技術を実社会でも活かしつつ、応用力を発揮する手助けとなるよう努めている。	科目名	学科・専攻	必, 選, 自	配 当 年 次	受講者数
	野生動物野外演習	動物応用科学科	選択	3 年	46
	基礎ゼミ	動物応用科学科	必修	1 年	28
	専門ゼミ	動物応用科学科	必修	3 年	8
	卒業論文	動物応用科学科	必修	4 年	11
	基礎野生動物学	動物応用科学科	必修	2 年	127
	動物応用科学概論	動物応用科学科	必修	1 年	139
	野生動物学	動物応用科学科	選択	3 年	79
	動物人間共生論	動物応用科学科	必修	1 年	155
	科学の伝達	動物応用科学科	選択	4 年	8
	地球共生系サイエンスワーク	動物応用科学科	選択	3 年	4
	獣医学概論	獣医学科	必修	1 年	149
	獣医学特論 I	獣医学科	必修	5 年	2
	野生動物学特論 I	動物応用科学専攻	選択	修士 1,2 年	5
	野生動物学特論 II	動物応用科学専攻	選択	修士 1,2 年	5
	動物共生科学特別演習 II-I	動物応用科学専攻	必修	修士 1 年	5
	動物共生科学特別研究 II-I	動物応用科学専攻	必修	修士 1 年	5
2. 教育の理念（育てたい学生像，あり方，信念）					
教育（Education）の本質は、学生の隠れた可能性や才能を educate する（引き出す）ことにあり、外部からの押し付けではなく、内発的な力を発揮させることが重要だと考えている。単に知識を与えることにとどまらず、自ら学ぶ姿勢を励ます並走者でありたいと思う。そのためにも、教師自らが常に学ぶ姿勢を示し、新しい問いを発信し続けることで、学生とともに学び、新たな問いの創造者であり続けたい。教師と学生といった上下関係が固定されがちな関係を超えて、学問に対する志を同じくする同士として、ともに高め合う存在になれば本望である。					

やや抽象的すぎて恐縮であるが、私自身が専門とする学問領域に引き寄せて表現すれば、一緒に野生動物の生態や行動の不思議を面白がり、その謎を解き明かすことを、学生とともに取り組んでいきたい。できれば、学生さんと一緒に私自身も汗をかく体験を大事にしていこうと思う。または、野生動物が引き起こす厄介な問題に頭を悩ませ、その解決の糸口をともに考え、改善のための努力を学生とともに推し進めていきたい。こうした営みを、面白い！と思ってくれる学生さんが少しでも増えてくれれば幸いである。

3. 教育の方法（理念を実現するための考え方，方法）

まずは実践。失敗を恐れずに取り組んでみることを薦めている。失敗をした場合、その原因を考えて、自ら改善させることが、学生の可能性を引き出すきっかけになると感じている。とにかく動き始めさせること。そのための敷居をなるべく低くするよう、環境づくりをすること。そうした工夫が大事だと考えている。

野生動物を対象とした分野で食べていくのはなかなか困難で大変なことであるが、こうした分野で食える人材を増やすことに、実際の研究・教育活動をつなげていきたい。例えば、野生動物と関わることを楽しむこと、それ自体が飯の種となるような実践を研究・教育活動に取り入れて行きたいと考えている。自分で新しい仕事を開拓していくようなパイオニアが生まれるのを私自身が面白がり、それを焚きつけるような黒子になれば嬉しく思う。

アクティブラーニングについての取組

オンデマンド配信を活用し、事前に講義内容を学習した上で、オンラインでの質問・ディスカッションに正規の講義時間を割り当てる取り組みを実施した。しかしながら、オンライン時での議論を活性化させる方法については、まだまだ改善の余地があるし、勉強がたりないと感じている。この方向性で面白い授業づくりに成功されている先生方の事例などを吸収しながら、改善につなげていきたい。その意味でも、教員相互の授業参観の取り組みなども積極的に活用していきたい。

ICT の教育への活用

オンライン講義の際には、外部の有益なサイトを直接表示し、副教材としてこれらのコンテンツを講義内容に活用するなど、最新の情報を伝えるライブ感を出す工夫も取り入れている。

4. 教育方法の改善の取組（授業改善の活動）

① <u>教育（授業、実習）の創意工夫（A～C）</u> B：講義の復習とさらなる学びの機会創造のため、講義の要点をまとめるレポートと、講義内容に関する質問を課し、出席把握も兼ねて毎回提出してもらっている。（添付資料1） ② <u>学生の理解度の把握（A～C）</u> B：講義の要点を自分の言葉でまとめさせることで、大事な点が学んでいるかどうかの確認に役立てている。（添付資料2） ③ <u>学生の自学自習を促すための工夫（A～C）</u> B：講義の質問内容について、特に自分で調べたことを紹介している場合には積極的な評価の言葉を伝え、自分で調べて深く学ぶ姿勢を推奨するように努力している。 ④ <u>学生とのコミュニケーション(質問への対応等)（A～C）</u> B：興味深い質問については、答えを用意するとともに講義の冒頭で紹介し、良い質問を褒めるなどして、質問を立てることのインセンティブになるよう工夫している。 ⑤ <u>双方向授業への工夫（A～C）</u> B：リアルタイムではないものの、質問に対する答えを参加者全員と共有することで、講義が一方向的にならないよう、心がけている。
5.学生授業評価 ① <u>授業評価の結果をどのように授業に反映させましたか。</u> 講義資料の配信方法に対する改善要望を頂いたので、その要望に従い、資料の配信方法を修正した。 ② <u>①の結果はどうでしたか。</u> 修正希望を伝えてくれた学生さんから感謝の言葉をいただいた。感謝の言葉をいただけると、教員としても改善の張り合いがある。 ③ <u>②を踏まえて次年度はどのように取組めますか。</u> 学生のニーズに合致しない情報発信の仕方をしている可能性があるため、できるだけ授業評価などの要望を取り入れ、改善可能な部分については適宜修正するように対応したい。
6.学生の学修成果 ① <u>学生の成績向上に資する取組を何か考えていますか。</u> 学科内での卒論発表会などには積極的に参加させて（今年度はエントリー者1名）、質の高い卒論研究を目指す動機づけに活用している。 ② <u>教育活動によって得られた学生の成果及び学生・第三者からの評価</u> 毎年、外部の方も交えて卒論発表会を行い、ご意見・ご感想等をいただいている。さらに、相模原市立博物館で開催された学びの収穫祭や、群馬県立自然史博物館主催の研究発表会などで一部の学生が研究発表を行い、一般の方からもフィードバックをもらっている。
7. 指導力向上のための取組（FD 研究会参加状況） 大学で開催される FD 研修会等には積極的に参加し、自分の指導力向上につながる情報を吸収するよう努めている。

8. 今後の目標（理念の実現に向かう今後のマイルストーン）

短期的には、野生動物を対象とした分野で活躍する人材を一人でも多く排出することを目指して、知識の定着や実践力の育成に努めていきたい。とはいっても、野生動物に関わる分野のパイは小さく、その市場拡大を図ることも重要な課題である。そのためにも、長期的には、新たな市場を拡大できるような新規事業を提案し、新たな分野を切り開いていけるような野生動物分野のパイオニアを育成し、この分野の拡大に貢献したい。

9. 添付資料（根拠資料）